

日独共同大学院プログラムの事後評価結果（平成24年度採択課題）

領域・分科（細目）	人文学・哲学（哲学・倫理学）
日本側実施機関名	東京大学大学院総合文化研究科
日本側コーディネーター （職・氏名）	大学院総合文化研究科 教授 梶谷真司
プロジェクト名	学際的市民社会研究に向けた日独共同教育体制の確立
実施期間	平成24年9月1日 ～ 平成29年8月31日
ドイツ側実施機関名	マルティン・ルター・ハレ・ヴィッテンベルク大学第一哲学部

1. これまでの交流を通じて得られた成果

共同課程の整備、継続的協力関係、教育研究効果等への成果

評 価
<input type="checkbox"/> 十分成果があった <input checked="" type="checkbox"/> 概ね成果があった。 <input type="checkbox"/> ある程度成果があった。 <input type="checkbox"/> ほとんど成果が見られなかった。
コメント
<p>【共同課程の整備】</p> <p>本プロジェクトにおいては、ドイツ側の大学との協働により、共同課程の編成が進んできている。骨子となるのは、プログラム参加学生が10ヶ月の留学を行うこと、共同大学院プログラム科目の設置、日独各1名の指導教員による恒常的な指導などであるが、共同セミナーならびにシンポジウムの準備・実施・参加により、プログラム参加学生間の緊密な協力関係が自ずと構築されるよう工夫されていた。</p> <p>また、共同セミナーの際には博士論文の研究報告と指導が行なわれ、論文完成に向けての十分な準備を行なうことができた。セミナー参加者は少数ではあるが、その分、複数言語での濃密な議論を行うことができたと考えられる。</p> <p>特設科目として、四つの「日独共同大学院プログラム科目」が設置され、なかでも春季・冬季の共同セミナー「日独研究演習」は毎年数多く実施されてきた。参加大学院学生はパートナー大学に滞在し、そこで開講されるプログラム科目に積極的に参加している。参加大学院学生に対して東京大学とハレ大学から一名ずつの恒常的な指導教員体制がとられており、複数の観点からの適切な論文指導を受けてきている。</p> <p>これらのことから、共同課程の整備は概ね進んでいるものと評価できる。</p> <p>他方、当該プロジェクトが「共同課程の整備」として掲げる「日独各1名の指導教員」、「集中講義」、「1週間程度の共同セミナー」等の体制については、一層の充実が望まれる。</p> <p>【継続的協力関係】</p> <p>2006年に締結された東京大学大学院総合文化研究科とハレ大学第一哲学部との学術交流協定ならびに学生交換に関する覚書が、2016年に5年間延長された。これにより、両大学で学ぶ学生に対する優遇措置が確保され、研究活動を円滑に進めるための各種の配慮がなされている。両大学の学生にとって、研究意欲を発揮するための恵まれた条件が整備されてきているといえる。</p> <p>また、日本側コーディネーターならびにプログラム参加教員は、ドイツでの集中講義・演習を定期的に行っており、またプログラムに参加する日本側大学院学生は、留学に際してもドイツ側の教員から研究指導を受けたうえ、ドイツの若手研究者との学術交流などにより、協力関係強化の基盤となっていた。東京とハレで年に1回ずつ共同セミナーやシンポジウムを開催するとしたことも、本プロジェクトが継続的かつ緊密な研究協力体制を築き、維持するための適切な制度設計であったと考えられる。</p> <p>これらのことから、相手国側の大学との継続的協力関係は概ね構築されていたものとして評価できる。</p>

他方、当該プロジェクトが実施する「協力体制」については、東京大学においては「特別聴講学生」、一方のハレ大学においては「各種の配慮」という枠組みにおいて構築されており、双方が「能力ある学生を受け入れるための選抜制度」を踏まえてプロジェクト参加者を選考しているかが明確でない点に、改善の余地がある。

【教育研究効果】

本プロジェクトの参加者は、相手国側の大学に留学し、共同指導体制によって、パートナー校の教員による指導を受けられるうえ、共同セミナーの準備や参加によって、同世代のドイツの若手研究者と議論することで、主題の理解を深めている。それにより日独双方の教員からの指導が、複眼的かつ学際的な視点の形成に資するだけでなく、博士論文執筆にあたっての欠くべからざる基礎となったと考えられる。また、本プロジェクト参加者の発表論文等のリストは充実しており、とりわけ、ドイツ語での研究論文、口頭発表の多さからも参加者が積極的に研究を発表してきたことが分かる。さらに国際シンポジウムでの外国語での発表の機会もまた、大学院生にとっては非常に貴重なものであった。さらに、当プロジェクト参加者から、目標には満たなかったものの、4つの博士論文が成果として産み出されていること、6名の学生がテニュア・ポストに就いたことは、このプロジェクトの教育体制が効果的であったことを示すものである。

これらのことから、本プログラムによる教育研究効果はあったと認められる。

2. プロジェクトの実施状況

プロジェクトの分野及び発展、コーディネーター及び参加教員の取り組み状況、教育研究環境の整備、経理の合理性

評 価
<input type="checkbox"/> 非常に効果的に実施された。 <input type="checkbox"/> 概ね効果的に実施された。 <input checked="" type="checkbox"/> ある程度効果的に実施された。 <input type="checkbox"/> 効果的に実施されたとは言えない。
コメント
<p>【分野及びプロジェクトの発展】</p> <p>共同研究の成果としては、研究論文集” <i>Bürger und shimin. Wortfelder, Begriffstradition und Übersetzungsprozesse im Deutschen und Japanischen</i>” (Hg. Manfred Hettling und Tino Schölz, 2015) が平成 27 年にドイツで、また『現代ドイツへの視座——歴史学的アプローチ 1：想起の文化とグローバル市民社会』（石田勇治・福永美和子編、2016 年）が平成 28 年に勉誠出版よりそれぞれ刊行されたこと、さらには『現代ドイツへの視座』の続巻も 2018 年以降順次刊行予定であることが挙げられる。</p> <p>統一テーマのもとに日独の研究者が協力し、継続的に研究する基盤は整えられ、それに基づく学際的・国際的な研究プロジェクトも立ち上げられている。この点を鑑みれば、対象となる研究領域へのアプローチという観点から、新たな局面を切り開いていると評価できる。</p> <p>【コーディネーター及び参加教員の取り組み状況】</p> <p>本プログラムの企画、運営にあたってきた参加教員が、参加学生の研究推進のために尽力していることが交流実績からうかがえる。例えば、コーディネーター及びプログラム参加教員は、年に 1 回ずつ日独で開催されるセミナーならびにシンポジウムに定期的に参加している。その準備は入念に行われ、シンポジウムの主題についても毎年工夫された取り組みが見られる。継続的な協力関係の維持は評価できる。この点がより深化するよう、一層の努力を期待したい。</p> <p>【教育研究環境の整備】</p> <p>東京大学総合文化研究科において、客員招聘枠の提供や、学生交換を支える事務上の業務がなされているほか、教養学部事務部の協力も得てドイツ学術交流会からもドイツ・ヨーロッパ研究センターの援助を通して資金協力を得ている。学内での教育研究環境の整備が円滑に行われてきていると考えられる。また、ハレ大学側でも、客員教員招聘枠、専用学生室、客員研究室が提供されるなど、研究交流の便宜が図られている。さらに学生交換に際しても、ハレ大学からのプログラム参加学生には、授業料不徴取、単位互換などが保障されていたうえ、図書館が自由に利用できるなど、大学院生にとっての研究環境も基本的に整備されていたとみなすことができる。よって日独双方とも、客員教員、プログラム参加の大学院生の研究スペースが用意されており、プログラム遂行</p>

の基本的な環境は整えられているといえる。

しかしながら、本プロジェクトの第一の到達目標として掲げられている「ダブルディグリー制度の確立」が達成されなかったことはプロジェクトの実施が計画通りには行われなかったと言え、非常に残念である。

【経理の合理性】

日独双方の当該プロジェクト関係者の友好的交流を促進した意味において、旅費は規定支出割合である配分額の 8 割を超え、経理は適切に執行されたと判断される。また、旅費以外の謝金・物品費の各費目もそれぞれ適正な割合で支出されており、謝金・会議費・その他の経費や出版に際するドイツ語校正費、会議における通訳者に対する謝金など、適切な支出がなされている。プロジェクト実施のための予算は概ね合理的かつ効率的に執行されていたと評価できる。

3. 今後の展望

実施に際しての要件として挙げている「事業終了後においても本事業において得られたドイツ側大学との協力関係を維持し、さらに発展させること」に基づく継続性

評 価
<input type="checkbox"/> 大いに期待できる。 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね期待できる。 <input type="checkbox"/> 一層の努力が必要である。 <input type="checkbox"/> 期待できない。
コメント
<p>【共同大学院としての継続性】</p> <p>ドイツ・ハレ大学第一哲学部との間では、本プロジェクトの前に実施されていたプロジェクトから数えて10年間にわたり緊密な関係を築いてきた。プロジェクトに参加した日本側の大学院生は、現在では大学に職を得ているものも多く、大学院時代からのドイツの若手研究者との交流は、さらなる学術交流、研究発展の礎となると考えられる。2018年8月以降も、東京大学のドイツ・ヨーロッパ研究センターが中心となって運営されることになっており、ドイツ側大学との継続的な共同教育研究活動（パートナー大学への博士課程学生の派遣、日独の複数指導教員体制と教員の相互派遣、共同セミナーや国際シンポジウムの開催）が行われることに期待を寄せる。日独のコーディネーターが中心となった新しいワーキンググループもすでに組織されており、プロジェクトの継続とみなしうる試みがなされていることは、本プロジェクトが実質的かつ効果的な基盤を形成してきたことの帰結であると言える。</p> <p>この博士課程教育プログラムに加えて、今後は、ドイツ・ヨーロッパ研究センターが提供する修士課程の「欧州研究プログラム」との連携を進めていくことにより、ハレ大学を中心とするドイツの諸大学、ドイツ研究協会、ドイツ学術交流会との協力関係強化をめざしている。さらに特定の主題に関しては、日独間だけではなく中国ならびに韓国の大学との連携、そしてまたハレ大学以外のドイツの諸大学との協力関係も築かれつつあり、大学院教育の国際化が継続的に維持されているだけではなく、市民社会研究の国際的な共同研究が、本プロジェクトを機縁に醸成されている。</p> <p>これらのことから、すでに公表された二つの書物としての成果を基盤としながら共同大学院の研究主題そのものを深化させていくこと等により、今後の本プロジェクトの継続、ならびに発展が期待出来る。</p> <p>なお、本プロジェクトが単に友情の醸成に留まらず、真の学術的成果を産み出すものとなるよう引き続き十分に留意されたい。</p>

4. 総合的評価（書面評価）

評 価
<input type="checkbox"/> 当初の目標は想定以上に達成された。 <input type="checkbox"/> 当初の目標は想定どおり達成された。 <input checked="" type="checkbox"/> 当初の目標はある程度達成された。 <input type="checkbox"/> 当初の目標はほとんど達成されなかった。
コメント
<p>平成 19 年度に日独共同大学院プログラムとして採択された東京大学大学院総合文化研究科のプロジェクト「人文社会科学における大学院教育の国際化のための日独共同教育体制の整備」を引き継ぐ形で、平成 24 年度に採択された同研究科の本プロジェクト「学際的市民社会研究に向けた日独共同教育体制の確立」の当初の目標は、ある程度達成されたといえる。</p> <p>共同大学院の試みは欧州の国家間ではすでに活発に行われているが、日独間の共同大学院、それも文科系分野におけるそれは先駆的な試みであり、教育面・研究面での成果は評価できる。具体的成果として、ドイツ語の“Bürger”と日本語の「市民」の観念の異同という重要な視角をたずさえて、哲学、思想史、独文学、歴史学、社会学、政治学、国際関係論といった人文社会科学の幅広い領域をカバーして、日独共同の大学院教育体制を構築する試みは、他の採択されたプログラムがすべて理工系であることからしても、ユニークで貴重な国際学術交流と評価できる。また、参加大学院学生による研究論文や口頭発表が多く、本プログラムにより提出された博士論文は、高い水準を示している。登録学生のうち6名が、すでに大学のテニユア・ポストに就いており、日・独・英の三言語で自在に研究業績を発表するスタイルを身につけた参加大学院学生は、今後の日独間の学術交流をリードしていく存在となることが期待される。</p> <p>共同研究の成果として現状、研究論文集『ドイツと日本における“Bürger”と「市民」』が、平成 27 年にドイツで、そして石田勇治ら編『現代ドイツへの視座』第一巻が、平成 28 年に勉誠出版よりそれぞれ刊行され『現代ドイツへの視座』は続巻も 2018 年以降、順次刊行（予定）された。このように市民社会の比較研究が広がりを見せ、双方の継続的な研究主題となり、今後の国際的な共同研究の拠点形成にとっては前進であり評価できる。この主題についての学際的・総合的な観点の提示については、今後のさらなる成果を期待したい。</p> <p>共同大学院の試みを具体的に実施するにあたっては、日独の教員間の緊密な連携だけではなく、プロジェクトに参加した大学院生の積極的な関与が必要不可欠であり、本プロジェクトがこのような評価を獲得しうることそのものが、評価できる。</p> <p>年 2 回のセミナー開催に際しては、日独の若手研究者が協力し、綿密な準備を行っていた。その過程における若手研究者のあいだの議論そのものが、教育的な観点からみて効果的であったと考えられる。</p> <p>この連携実績は、今後の両国間の人文社会科学系の教育研究交流を発展させてゆくうえで有意義であり、参加教員・学生の労を多とするとともに、その経験を活かして、日独両国の「市民」間交流に末永く寄与していただきたい。</p> <p>しかしながら、本プロジェクトは「10 件のダブルディグリー（博士号）の授与」を第 1 の目的に掲げて申請された以上、ダブルディグリー制度の確立が達成されなかったこと</p>

は残念である。その検証は、本プロジェクトが今後さらに充実したものとなるためには不可欠であり、実現への作業工程などの具体的な提言を含め、引き続きその実現可能性が検討されることを期待したい。